聖書を調べて信じる

細井　茂徳

今朝の箇所には、テサロニケで迫害に遭ったパウロたちが西へ８０kmほど離れたベレアへと移って、そこで御言葉を語った時の様子が描かれています。ここでもパウロとシラスは、まずユダヤ人の会堂で伝道を開始しています。ベレアのユダヤ人たちは、テサロニケにいたユダヤ人たちよりも「**素直**」で「**非常に熱心**」な人たちで、パウロらが宣べ伝えていたことが本当に「**そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた**」のでした。コミュニティの中心に、いや、彼らの生活の中心に「**聖書**」があったのです。すると、多くのユダヤ人が信じ、またギリシア人の上流婦人や男性たちも少なからず信仰に入ったのでした。ところが、ベレアでのパウロたちの伝道活動を聞きつけたテサロニケのユダヤ人たちが、わざわざやって来て、群衆を煽動して騒ぎを起こしたため、ベレアの「**きょうだいたち**」は、とりあえずパウロだけをこの町から去らせ、アテネに向けて「**送り出し**」たのでした。

実は、このベレア伝道の記事は、直前の１～９節までのテサロニケ伝道での記事と対をなすように、まるで続編であるかのように描かれています。その結びつきを印象づけているのが、１１節「**そのとおりかどうか**」という言葉です。「**そのとおり**」とは一体“どのとおり”なのかというと、１７章３節でパウロがテサロニケで聖書に基づいて説教したことが前提として語られています。いずれの町においても、パウロは「**聖書**」に基づいて伝道しました。どう聖書に基づいて人々に福音を伝えていったかと言えば、“イエス・キリスト”の福音を伝えたのでした。聖書には様々なことが記されていますが、要は、イエスこそ旧約聖書の中で三百数十以上もの預言がなされ示されていた救い主に他ならない。イエスこそキリストである。そこにこそ核心があるのです。このことこそが、代々の教会が、私たちが大事にし続けている信仰です。